

夢は酪農家

日本獣医生命科学大学 応用生命科学部 動物科学科 3年 碓谷 のぞみ

「何て大きくて、目が綺麗なのだろう！」それは大きな動物が好きだからという理由で入学した都内の農業高校で、初めて対面した乳牛に対する第一印象です。

それまで、乳牛と言えどもぐもぐ口を動かし、色は白黒で牛乳を生産する動物であると思っていました。しかし、間近で見る乳牛の体の大きさに驚かされました。目は不思議な色合いに満ちていて、性格はとても優しく、触ってみれば温かい。目の前にいるこの動物がいるからこそ、大好きな牛乳が飲める。その愛らしい家畜を高校生活の3年間ずっと世話するのだと思うと、とても感動したことが昨日のように覚えています。

それからの私は、ひたすら乳牛の虜になりました。休日含め毎日のように牛舎に足を運び、牛に挨拶して、掃除や飼料給与そして搾乳をこなし、暇さえ出来れば牛の観察をして毎日を過ごしました。1年生を終える頃には、通い詰めた成果のゆえか、牛たちにも顔を覚えてもらえ、懐っこく擦り寄ってくれるようになりました。

私に転機が訪れたのは、高校2年の夏、初めて牛の分娩に立ち会ったときでした。先輩に教えてもらいながら事前準備として分娩介助道具の用意やカーフハッチの殺菌、体温記録、行動観察などをして、分娩予定日を今か今かと待ち望んでいました。そして分娩予定日を数日過ぎて、その瞬間がやってきたのです。

「破水している！」先輩が叫びました。この声を聞いて牛舎に駆けつけたときには、子牛の蹄がちょこんと母牛の体から出ていました。事前の準備も整えて、いざという時のために分娩を補助するために方法も聞いていたのに、力む母牛の声とその場に走る緊張感に怖じ気づき、呆然と立ち尽くしてしまう私でした。

母牛は3回目の分娩でしたが、胎児はなかなかその姿を表してくれません。「介助しよう」。先生の一言で分娩介助が始まり、やっと子牛が生まれました。体重45kgの雌のホルスタインでした。子はただちにカーフハッチに移動させられました。また、母牛は子牛のための初乳を出すため搾乳しました。

子牛に哺乳しながら、私は分娩を思い返していました。初めての経験とは言え、牛が命がけで子を産む場面です。子牛も命がけで生まれようとします。最悪のシナリオに至らないようにするには、時間はありませんでした。今回は先生や先輩がいたからこそ、分娩の介助が行えましたが、もし私が一人きりであった時、果たして冷静に対処できたかどうかは分かりません。普段からいくら牛のことを観察していると言っても、分娩の兆候すら見逃した私でした。分娩を予知するには、母牛の餌の摂食量や飲水量、乳房の張りや外陰部の様子等を観察しなければならなかったのです。また、難産となった時の対応や、分娩前後の

母牛の飼養管理、子牛の育成もより多く学ぶ必要がありました。

乳牛の学びを深めていく中で、いつしか将来は酪農の道を歩もうと考えていました。

「より多くの知識を得よう。実習を重ねよう。いつか酪農家になるときに活かせるように。」そう決めて卒業後の進路を、畜産系の大学進学としました。繁殖学・栄養学・遺伝学・行動学・経営学等、酪農に関わる分野を4年間じっくりと学び、知識の幅を広げようと思ったのです。さらには大学という一つの組織に集まる多くの人との交流を経て、自分の視野を広げ、酪農だけにこだわらない視点を作ることも目的でした。

農業、酪農に触れた期間はわずか数年であり、実家は農家ではありませんから、当然、農地も牛も牛舎も農具もありません。しかし、非農家であることがハンデであると思ったことは一度もありません。

牛が絶えず発する信号、いわゆる「カウシグナルズ」の観察はとても重要です。例えば「この牛は歩き方に不自然なところがあるな」と感じたら、その牛は蹄病の恐れがあるのか、何らかの原因で足を怪我したのかもしれませんが。言葉を話せない牛が発する「シグナル」にいち早く気づき、その対応を速やかに行うことが肝心なのです。

以前のようにただ呆然と立ち尽くすことのないよう、できる限り牧場にでかけ実習する機会を得ようと努力しています。経験が足りないのなら重ねること、数をこなせば身に付くことがきっとあると信じています。

私は必ず酪農家になります。

自分自身の牧場を持った暁には、ウシとヒトが快適に過ごせる環境を作ります。ヒト（私ですが）は慌しい作業をせず、常に穏やかであることを心がけます。ヒトが忙しく、時には大声を上げてウシに接すればウシも心地よくないでしょう。風通しがいい、飼槽が綺麗、牛床が清潔であるなどは前提として、人が穏やかであること。これも快適な環境づくりに必要だと考えます。

そして何よりも、多くの人が集う牧場にします。観光牧場ではなく、私のように非農家出身であっても、酪農ができること、また新たに就農したいという人に少しでも力を貸したいのです。酪農家戸数は減少しつつあり、その勢いは止まりません。その原因のひとつに担い手不足があります。後継者が確保できず、離農を余儀なくされる酪農家も大勢いるのです。私は今まで実習先の多くの酪農家の方々に酪農だけでなく、人生も教えていただきました。私の酪農家になる夢を心から応援してくださる方もいます。その素敵な酪農家から受けた沢山の恩を、私の夢に続く「新たな担い手」を助けることでお返ししたいと思います。

これから何年かけても、いくら遠回りをして、お世話になった酪農家や、今まで愛した乳牛たちに誓って。私は酪農家になります。